

「あすなろ」個人参加難病患者の会 1974年
「あすなろ会」 3号 2月20日

三寒四温の言葉があはまるよな今日この頃
です。会員の皆様お元気ですか。いよか
異常な物価高、物不足等 寒春の私共にとつても、
大変くらしにくいこの頃です。「光の春」ともいいた
いよな「春光」を受けるとき、この冬も無事におおせ
といよびも感じます。元気にあはれまはしよ。
会費はこの1ヶ月に3名入りました。

病名 交通事故による両下肢障害
慢性胃腸炎 自律神経失調症
脳下垂体欠損異常低下、関節リウマチ。

— この後のニュース —

— 1月20日「あすなろ会」新年会 10名出席。
この折の字々同封します。折あはれ吹雪でした
か。会員はそれぞれに病氣との闘病生活等
を語り、いよ年月の困難さ、辛さ等 訴えられな
いよに話し合いました。「病氣で死ぬのよはなし
寿命たのち」とも言い、一日一日を大切に生きてい
つよる会員のお話しでした。春には例会を持ち
ます。「あすなろ会」か 会員の心の支えといよ
とも痛感ほした。又、あめにかいよるのを望み
に2封します。

— ボランティア 植村さん — 「あすなろ会」が大変で

しよと、高校一年のお嬢さんが手伝いにきて下さるに任じたり、一週に一度3時間を会のためにゆいて下さっています。同封の字号にのついています。大変ときばきと事務を片付け下さって有難く思っています。「あすなろ会」を支える一つのかたです。

—野村春吉氏御遺族から— 新聞記事を流れて、御職業はもと馬長工、老人クラブの会長と知られる一面をお知らせ下さいました。又「あすなろ会」について、「今回のレコック（せきはらわたこと）のりこに、今後とも医療、福祉の改善、仲間とのはげまし、政治の貧困などの問題にかんはつた下で、主人のために生前は色々ありがとうございました」とのこと。2月4日の多額の寄付をお送り下さいました。誠にありがとうございました。会の発展のために使わせたいと思います。おめにかけたおかげで創刊号は「霊前にさかかてあります」の一文は、涙に読みました。御めい福心よりお祈りいたします。

—2月5日— 道難病厚生加団体と共に、厚生委員会委員長等に「四十九年度で、難病厚生管理、事業費に道費助成を十分につけて下さい。道議会の立場で応援にほしい」と要望しました。会長役員2名参加。16日道予算案が発表されました。「あすなろ会」はまた多

くの疾患を難病指定ほしいと訴えたりはされ
ません。会員の病気は難病指定されませんでした。
新聞紙上でごらんには「エッセイ」と思いますが、

道が難病の病床を拓けることになり、具体化
はまだ先のことです。よすが、明るいニースといえ
るでしょう。介護手当支給も予算に組みました。
会費で障害手帳 1、2級の方は支給されます。

1月17日STVテレビで難病がとりあげられ
から、各地の方から、局宛、会宛に好意あるお
便りや、体験等が寄せられました。その中で会員
中、6名のパーキンソン症候群について、治療法
と、その体験の手記を公表して、本南地区の
健康のよ手帳をのせました。
病気がつた主婦の手記です。

私は20才の時兄が軽度の洋服着の経験が
あることに、それから6年間洋服仕立に専念する
うちに、首が少しキレるになり、又右手が小まな
仕事をする時など、ふるふるにふるふるに気がつき、
其の時からほいほいの自覚症状でした。
それから気になるので、注意にいたるうち、人前

場は、キーン張る場所(精神的)、又恐い場面
など、異常に体が硬く倒れ、首、手足などが1.3と2
ごうはよくなつたのです。健康体の人であれば、
どうしたとかあつた、体がすまわば元の状態にか
ります。しかしどうもはたひの、方の病院に座
り、北大、医大、その他ハリ、キコ、アルマは、
いふものは何かのたど、神にまづ通う神様に
りました。私は元素無神論者で、理論的でない
ものは信用しなかつたのです。私が神様にまづ通
つたのだから、----- 苦痛の苦しみかわかります。
高次、医者はいふは、恐怖症、神経症と診断
せると理解し、おぼろげな時期のころのを待つ、くら
い33512、29才になり、3年の間一向はよくなる
が、又たいい世行もすまなく、たいてい仕事出来たの
が残念でした。友人達は皆さあ、幸福に暮ら
しているのを見せました。一大決心をして、転業し
ました。青果物の行商です。小売店仕事をしていた
首、かたすますが、体全体を動かすと、かたすまが
消え、大変よくなつたよな気がしていました。

数年後に結婚。現在青葉区在住にしています。
2年前 病氣は一向によくなりず、少しづつ進行して
いきました。「道新」はパーキンソン病の定位手術
について、医大の千葉豊昭先生が書かれていました。
早速医大に行き1ヶ月程通院しましたがきりめが
なく、手術をみうけました。自信のたよりなま
たこの病気でみうけようとした。もはや死なねば
治ぬ病と思っていました。翌年(昭和46年3月
2日付読売新聞)を近所から借りてきた
何べんくり返しをみました。早速手術せよと診
察をみうけられたところ、1も2もなく、パーキン
ソン病ではないかと。これと類似した病氣のため
早く入院するよりのことになり、47年1月10日
1人上京し入院しました。症状のひどい時は
健忘体でも極度の恐怖；キレ張によつて体が
ふるふ。固くなり、……この時の気持は言ふべから
ず、……この状態が常に続いていると、精神
的にキレ張に。じつと2、3人たくなります。
落伍か、気持おろしく、キレ張と2も若いもの
です。そこで予期している場合や、外出の時等に2は

3
ふ、酒をのんで行くと一時的にマヒは少しおさま
り、用をたせると三人はるときはにこにこして
いました。入院して、先生から、八割までの状態
はよくなる、との事で、精密検査を受け、手術前日
家族を呼び、いろいろ相談しているうちに、手術を
受けた人の様子を家族が知りたいままに、この結果
本妻のパーキンソン病は治るおそれがある、後遺症が
出たとの事です。新聞記事には三人はよくなったとい
ました。手術は三日のぼし、この間には何人かの
手術を受けた患者さんをお見送りしました。この人ま
たは手術したあとのよかった、心配はしていないとい
って決心して手術に入る前、院長が手術の診
察の時、八割はよくなるというたが、六割は保
証する」と言ってきた。私としては一割でも二
割でも少しは楽になればと手術を受けました。
前日に頭の状態をみせられたら、首(前後)
右側のよくなること、左の運動麻痺の根本
がハッキリと肥太にいました。手術の間は一
時間、何も痛くなく、手術の最中泣かれました。

手術の前後物産を記すといふことは、奥の
手記である。

手術前の主人は、若くはをまきわすたれ、お酒
の力をかり、おにじりしたの2。知らな方は
ふるふるの2。アト2はたいかと思つていた2
2。気のはる会合や集り等には、一ぱい
かけたといふと出られたい、又2した所に
りません2した。皆中をもちせるとか、
播にならとかの姿勢でない、長時間
もたないの2。かたが
ふるふるの2。後にはお酒もまかなくな
きた時に、新聞をよみました。

手術の前

主人が先に上座に検査の結果、
の2と急ぎ私も上座しました。入院患者と大
大たすね、手術前と手術後の様子を書きました。
パーキツの方ほどよく治つたよ2
食物を飲みぬかしたの2。らくに
命拾ひしたといふ方もあります。

手術の1時間前になつた。外車患者の
言語障害と右足障害が著つたといふ話
「ダレガイセツペキ」の上に立ちた思ひつた。

病院の階段を上つたり、下つたり、！なから、相違する人もたかま、心をきめて主人にきました。わがと茶化して、「もしヨイヨイのレレレレになつても、手行さうけるか」と言いましたら、「それだけ今の若しみにくらべればいいから、やってみる。」この一言で私も神に運命を任かせようと思ひました。

その後の経過

病状 2年目ですが、

1. 1年目の時、言葉が酔った人のぶらぶら聞かれましたが病状はありません。

2. お酒はひどく酔った時、よくよく（気をつけて）みると、右足がぶらぶら前に出にくくなるくらい。

3. 右手の書きものが、前とはいくらかちかちです。

703入の面とに。

1. お酒をおより呑まなく^{よく}なった。

2. どんどん会合に出かけると、後遺症が少し受けて明るい性格になった。

3. 主人の若しみをみてもいまだ私と12も病状

よかったです(しみじみ思います。おるまはたまに
出る事がありますか、本人は氣にほらないと言います。
手術について

1. この手術は、月2回4回を著陸とせよと、おる
まは、(という病原にペリ)とあることが、記録
(という先をいいたいと出来たよ)です。

2. 脳は右は人の神経が導つている所には、電
気の江の江で、まわりの神経がこじこじその
日かたつておる、たぶんよくなるのだと思います。

3. 高い治療と頭の手術と言はると、必ず
治ると言はない厚がむすかしい、とい思いますか
おれが立つよかったですと思つてます。

以上少しおまじに立てばと思ひました。

医者の進んている時代から、皆持希望とも
かんがうては、私達もどう然、一枚の新
聞を読まなかつたら、どうであつたかわりませ
ん"と。

以上

御夫妻の手記をのたまいました。パーキンソン病候群
といふのはどういう病気なのか？

パーキンソン病 (46年3月2日は 流石新開)
振せんマヒ病とも言ふ。発病は40-50才多く、この
症状はふるま、筋肉の硬直、運動減退がある。
ふるまは荒く、或はゆっくと規則正しく一秒に
一回、五回。運動や睡眠中は一時止まるが、興奮
おと激しくなる。手足くちびるなどから、体全
体にひろがる。歩く時前こごみの海から、アゴを出
し、手足を軽くまげ、動作がよい。筋肉の硬
直のため、顔の表情がたへり、能面のようになる。

数年前から、この病気の研究が盛み、間脳の空胞に
ドーパミンが足りないことがわかった。これを補う
ために、L-ドーパという薬物を大量に投与する方
法が開発された。しかしこの薬物療法は、筋肉の
こわばりや、運動減退にはまじく、ふるまにはま
り効果がたへい。病状にたへいで L-ドーパ服用
と、定位脳外科手術をうまく組み合わせた
療法が治療法としては最良の治療と言われている。

この脳定位手術は、川大医学部脳神経

経科 橋本博太郎教授が年がた2いるよす。
デー-1はるとこの年術1,500例の35, 1例の
死に1かたはとの2とす。

この年術に開する記事は専門的なたるの2
この2は省きました, 記事のくわいごとを
りたい方は厚路に下す。よ知らせします。

皆様の病氣について御質問があれは,
調べてお知らせしてします。又、会長の病氣
は2の2の年地とのせ2いくつもりす。

す2124号には3名の会長から手記が寄せ
られてします。多くの方からの手記を待たして
又、いつも病氣学について、心配してしますの2

会に御連絡下す。生活上、医療費に
もよらせ下すは、適当な処置をとりたいと思
います。心を支えつたために、会の発展に
力を寄せ合います。御体よくお大事に。

「あすなろ会」札幌市東区北28条3

原2か方
電話